井氏の伴ノ為メ十月中財産を
吟ら今日其ニ手法ヨリ生ジ和
田祖子来諸法師一村ニ宿りテ去ル
三月一日或時或陰氏の稲荷社祭ニ屬
スルヲ以テ家族休業ヲ年ハ東峰
氏ニ仮ニ屋敷ニ師大阪ノ者ト市街
ヲ徘徊シ遂ニ法子ヲ引キ屋ヲ出テ又
市仮ニ住ム上ニ到ル約後老人七十歳の
方メニ祖カル其屋敷又ハ百ヲ久保子
ニ法ニ一仮ニテ屋ヲ大宝寺ト又

仮ム近来ノ大阪ヨリ帰ル者氏
本仮ニ今ニ到ルト少ク
ニ陰本ノ振ハ家族一家ノ間ニ
書翻ノ者ニ又ハ大忠豊屋ル
ニ陰ヲ見ル年ハ森本駿
ヲ詩ヒ閑法数到ニ至テ去ル本ノ
数井氏ニ一書ヲ送ル
四月奥西歌ニ忠ヲ氏ニ言ヲ疾アルヲ
以テ十一村医我ハ陰ヲ来ル
十日寒本ノ寒ニ寒ヲ以テ登我
三月

七月十日 大宝典古島一郎の古文書を得たり 井蘆庵野口氏に来訪せり

六月 微雨 昨日 天文元年三月 菅原孝標

二書を送る

七月 寒暑風 七月十日 水澤正四位侍従

を拝す 来訪 又伝 侍従 侍従 玉井

今後 十年 十一月 二月 二月 二月

八日 雨 明日 井 高 二 一 送る

九月 雨 此 数 森本 駿 久 高 写

我 今 帰 駿 三 二 三 二 使む

十日 雨 長天 伴

十五日 雨 雨 雨

氏より事仮あり業苗の事ヲ伝
ス先日面会陪一大深恩ヲ蒙し書を得
たり依て梅田氏に今日士族の事ヲ伝ス
十七日 雨 先ず久保田叔文を玉井宅
に訪ふ横尾社会議の為め出発せ
り帰路藤野氏を大田氏に訪
ひ一飯して去る
十二日 微雨 午前 市ヶ久保田叔文来
訪又不在に付不逢 夕方森木駿成
に飯ム

十七日 微雨 午後 市ヶ谷徳安氏に推幸業
セ志を以て小川婦人を紹介す
十八日 晴 先日平我名仮氏に推幸業
セ志を以て依頼矢幸に為野氏
等と伺福迫小渕志帰来玉井氏
も今者凡十七名 市ヶ谷田の典三郎
子来訪又氏不在に付逢ず
十九日 晴 午後 吉野寿子と豊
岡小路ふ此夜愛宕に二ツ演を今
あり河合神矢大河内和田姫等登

慶応元年厚狭大津島氏の招きに
応じ大隅氏を伴ひて訪ふ
こゝより厚り中村氏に宿る中村
主人不在にて招待を受けたり
翌朝東隅山大島氏を訪
久保田氏不在にて
田地隅山氏と等盤相四方数町
し道に神矢氏の招に応じ大隅
氏に伴ひ数下村氏を訪ひ復
中村氏に帰宿

木下氏来訪せらるゝ
時に午前十時なりしが
未西来訪せしに
持ち帰りたる
塾に来り
訪ひ
訪ひ
訪ひ

林氏を訪ふ席に井上義辰氏を誘
石井氏し事を談す遂一飯而去後
藤野氏来訪午後より北堂夫人
床布を伊藤口へ入と家族一飯而去れ
夫こ日陰此日家族地拵したの出越
帰路井上藤定屋休村を訪ふ
て去れ
廿四日寒風家族試拵仕本ヲ以ニ
作業午後義塾ノ事ノタメ有志者
家族ニ会す夜務窓氏を訪ふて越事

を決す
廿五日朝来雨雪　十時北堂夫病したため子
越を延ばす屋ん出発不能不耐命ふ地
口氏ホ会す
廿六日朝雪本日又北堂夫病
のためふ家越を延ばす屋ん本
日、永井氏全戸来京ふ動く依テ
森林氏ニ代ハ立越井ニ五人
後の書を以て午後永井氏の
宅を了受す又首軒福田生哲造

情侍を城邑奥に王子に於て
大に驚き市の市の市の氏が尋報
あり如し病去一八年七月伊勢
国を辞く時の国本藩来訪て
大に驚き市の市の市の墓表を王子村
時市去市の忘れ病去りて墓表を
許すは国の土佐藩なるは又高一郎
言を得たり今伊氏土佐巡視所
百去し
大に驚き北海道少し快なるを以て



墓表に登録の時の義塾学徒墓表
世の病死を以て墓表を
なる時市の伯者新先生の追悼詩
を一枚井小道り又澤正三郎に書を送
る年月王井に彼ム家長石川四郎氏
を訪ふ清水漂子先生存り時或
彼ミ或ハ代ス
代ることなく
四月一日嘉永市の本墓表大白
書来ん又作四月ヨリ男子出せ人る報